

ZOOM
UP

JETプログラム経験者の活躍

外国青年を招致して地方自治体などで任用し、外国語教育の充実と地域の国際交流推進を図る事業「JETプログラム（語学指導などを行う外国青年招致事業）」。1987年の開始以来、78か国から7万7,000人以上が参加してきた本事業は、世界最大規模の人的交流プログラムとして知られる。

JETプログラム参加者（JET参加者）の役目は、最大5年間の任用期間内に留まらない。プログラムを終えてもなお、母国と日本とをつなぐ「懸け橋」として、草の根の国際交流の一端を担う。

本稿では、それぞれの形で「懸け橋」として活躍する、JETプログラム経験者（JET経験者）の多様な活動内容について紹介する。
〔(一財)自治体国際化協会 JETプログラム事業部〕

1 JET 経験者による組織

(一財)自治体国際化協会 JETプログラム事業部調整課

世界で評価される交流プログラム

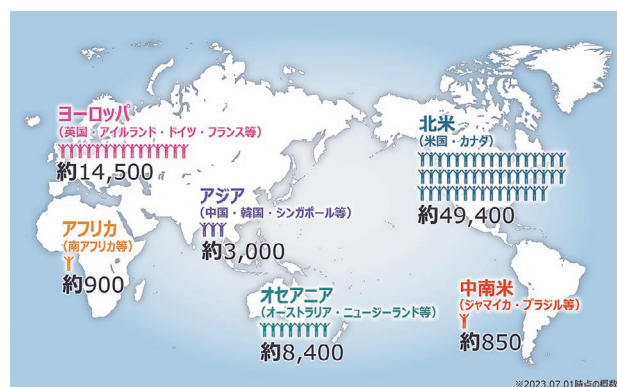
JETプログラムは、地方自治体が総務省、外務省、文部科学省およびクレアの協力の下に実施している。主に海外の青年を招致し、地方自治体、教育委員会および全国の小・中学校や高等学校で、国際交流の業務と外国語教育に携わることにより、地域レベルでの草の根の国際化を推進することを目的とする。JETプログラムに関わる日本の各地域の人々と参加者が国際的なネットワークをつくり、国際社会において豊かな成果を収めることが期待される。

同窓会組織「JETAA」

JETプログラム終了後も広がる国際的なネットワークを体現する存在が、JETプログラムの同窓会であるJETAA（JET Alumni Association）だ。本組織はJET経験者の有志を中心に1978年に構成された親睦団体であり、

日本とJETプログラムに参加している諸国との相互理解を深めることを目的として活動している。2024年1月現在、JETAAの活動は日本を含む19の国と地域にわたり、支部数は54、会員数は約2万1,000人となっている。

JETAAの活動内容は支部によって異なるが、主には以下の2点が挙げられる。



世界各地に広がるJET経験者

①日本との交流促進：

日本文化の紹介イベントの開催およびブース出展、自治体の国際交流活動の支援、現地の日系機関との交流など

②JET プログラムの支援：

JET プログラム採用活動の支援、出発前オリエンテーションへの協力、帰国者のキャリア支援など

国	会員数 (人)
JETAA アメリカ	8,500
JETAA カナダ	3,300
JETAA イギリス	2,700
JETAA オーストラリア	1,600
JETAA 日本	900
JETAA ニュージーランド	700
JETAA 南アフリカ	700
JETAA アイルランド	500
JETAA 韓国	400
JETAA フランス	300

JETAA の主な国別の会員数 (2022 年 3 月時点の概数)

JETAA の統括組織「JETAA-I」

JETAA の上部団体で、世界中の JET 経験者の国際的な統括組織が、「JETAA-I (JETAA International)」である。JETAA 各支部、クリア、外務省との連絡調整、世界中の会員への情報提供などを行う役割を担う。近年の主な活動としては、以下の項目が挙げられる。



• KenJETkai

JET プログラム関係者のための県人会に相当する、各都道府県ごとに活動する Facebook グループ。現役参加者、経験者、自治体の担当者など肩書を問わず、関係者であれば誰でも参加が可能な情報交換の場である。JET プログラムの任期を終えても、任用先の地域とのつながりを持ち続けることが可能となる。

• JETAA 国際会議

JETAA 各国代表同士の情報交換および連携強化、JET プログラム関係者全体の協働体制の強化などを目的として 3 年に一度東京で開催。2022 年 11 月の開催時には、国内外 19 の JETAA 支部、総務省・外務省・文部科学省、

クリア、現役参加者およびその他関係団体から約 70 人の代表者が参加し、今後の重点的な取り組みや JET 参加者のキャリア支援、JETAA の活動支援、自治体と JET 経験者とのつながりなどについて、意見交換を行った。



2022 年 JETAA 国際会議の様子

• JET 動画コンテスト

JET 参加者および JET 経験者と日本のつながりを継続的なものとするため、2023 年から 2024 年にかけてクリアとともに主催している動画のコンテスト。現役 JET



参加者および JET 経験者を対象に、独自の視点で発掘した、あまり知られていない日本の魅力などを紹介する動画を募集した。特に優れた作品の制作者には、日本までの往復旅費などを贈呈し、2024 年夏に東京で開催する授賞式に招待する。授賞式では優秀作品の上映や交流会も予定しており、多くの JET プログラム関係者に参加いただきたいと考えている。

• ポッドキャスト「After JET」

JET 経験者が、JET プログラム終了後の生活や仕事について紹介するポッドキャスト (インターネット上の音声配信) シリーズ。業界・職種の紹介、日本での就職活動、JET プログラムでの経験など、多岐にわたるトピックについて、毎回異なるゲストを迎えて配信している。



ポッドキャスト「After JET」
(英語のみ)



JETAA-I ウェブサイト
(英語のみ)

クリアは今後も、JETAA-I との協働体制の強化に努め、JET 経験者と日本のつながりの発展に向けて取り組んでいく。

JETAA ベトナム支部会長 Trương Đình Lê (チュオン・ディン・レー)

JETAA ベトナム支部設立までの過程

はじめまして。JETAA ベトナム支部で会長を務めている、チュオン・ディン・レーと申します。私は、初代のベトナム JET プログラム参加者で、2012 年から 2017 年まで愛媛県西条市の国際交流員（CIR）として勤務していました。



JETAA ベトナム支部創設記念レセプションにて

2023 年 9 月の日越外交関係樹立 50 周年を契機に、在ベトナム日本国大使館およびグレアにご協力いただき、2023 年 11 月 8 日に JETAA ベトナム支部を設立することができました。

ベトナムの JET プログラム参加者は、他の国と比べてまだ少ないですが、JETAA ベトナム支部が JET 経験



ベトナム支部会員のオンライン形式での挨拶

者同士のつながりを維持し、日本文化紹介などの活動を行うことで、日本とベトナムの友好関係強化に少しでも貢献していきたいと考えています。

JETAA ベトナム支部の活動内容

JETAA ベトナム支部では現在、JET プログラムについて多くのベトナム人の若者に広く知っていただくため、Facebook にて JET 経験者と現役 JET プログラム参加者のさまざまな経験や日本の文化・風景などについて紹介しています。

今後の活動については、会員同士の交流促進に加え、新しく日本に行く JET プログラム参加者や、日本から帰ってくる参加者のサポート、そして日越文化行事への参加などさまざまな活動を実施していきたいと考えています。

また、在ベトナム日本国大使館のホームページに投稿される JET プログラムの参加者募集情報をシェアし、さらに情報を広めていく予定です。



ベトナム支部の設立発表

現在の仕事について

私は現在、在ダナン日本国総領事館の領事班に勤めています。領事班では、総領事館の管轄地域の在留邦人や観光客の生活に関するサポート、各種証明やパスポートなどの発行、ベトナム人に対するビザの発給などの業務を行っています。

JET プログラムで得たもの

私は、長年日本に住むことで、日本人の生活や考え方、文化について学んできました。特に西条市役所で働いていた5年間では、日本人職員から市民に対する電話や窓口での接遇、そしてコミュニケーションや報連相などたくさんのビジネスマナーを身に付けることができました。



レセプションにて名刺交換

市役所で学んだことを現在の仕事に活かして、窓口や電話の対応では、相手の気持ちを考えながら丁寧な言葉で対応しています。相手の方を不快にさせないように日頃から注意しながら業務を行い、サービスの質をより向上できるように励んでいます。

JET プログラムで得た貴重な経験は、現在の仕事や生活にも非常に役立っています。



レセプション出席者と

今後の抱負

今日、日本とベトナムの友好関係が益々発展しています。2023年には、外交関係樹立50周年を迎えた両国関係の「包括的戦略的パートナーシップ」への格上げが発表され、今後人的・文化的交流や経済分野での連携が強化される予定です。私たち JETAA ベトナム支部も、日本とのつながりを持ち続け、両国の友好関係の発展に貢献することを望んでいます。

JET プログラムに参加したことは、私にとって素晴らしい経験であり、自分の視野や人生に良い影響をもたらしています。

今後は JETAA ベトナム支部の役員として、新しい JET プログラム参加者に対して日本へ出発する前にオリエンテーションを行い、また、現役参加者から相談があった場合は、必要に応じてオンライン形式でサポートしていきたいと考えています。



JETAA ベトナム支部会員と

プロフィール



Trương Đình Lê
(チュオン・ディン・レー)

ベトナム・フエ市出身。自身で立ち上げた設計事務所での仕事ののち、2012年から2017年まで愛媛県西条市のCIRを務める。帰国後はIT企業勤務を経て、2020年より在ダナン日本国総領事館勤務。2023年より JETAA ベトナム支部会長。

はじめに

2012年から2015年まで3年間、JETプログラムの外国語指導助手(ALT)を務めました、ガーディア・ブレアと申します。現在は長野県を拠点とし、(一社)長野県観光機構でインバウンド誘客に携わっています。

元々はアメリカのメリーランド州出身で、遠い場所に住んでいたにも関わらず、若いときから日本に興味を持っていました。日本に住んでみたいと初めて思ったのは、高校2年生の夏に修学旅行で日本を訪れたときです。東京、大阪、京都などの日本の主要観光地をめぐり、日本の学校と交流し、日本の文化に触れることができました。

そのころからJETプログラムの存在については知っており、大学を卒業したら参加したいと思っていました。幸運なことに、卒業したその年に参加することができ、ALTとして長野県中野市へ赴きました。



長野県のPRキャラクター「アルクマ」とのツーショット

ALTの経験

ALTを務めた3年間、中野市のさまざまな小中学校で英語の授業を手伝いながら、週に1回、大人向けの英会話教室を開いていました。小学校では子どもたちと英語を使ったゲームで遊び、中学校では音楽やポップカルチャーを交えながらしっかりと英語の基礎を教え、英会

話教室では英語での自己表現ができるように生徒たちと練習をして、それぞれのレベルに合わせた英語教育に励んでいました。

小学生から大人まで色々な生徒と向き合えたおかげで、相手の興味関心とニーズに応じて、指導方法を応用することができるようになりました。特に困難だったのは英語に全く興味のない生徒でしたが、その子の興味関心を授業に絡めてみると、だんだんと英語に挑戦してくれる生徒が多くなりました。

プライベートでは、毎週のようにJETプログラムで知り合った世界中からの参加者と遊んでいました。日本アルプスを縦走したり、スキー場で滑ったり、歴史的な街道を歩いて江戸時代にタイムスリップしたりして、一年中思う存分に楽しんでいました。

これは日本という異国に引っ越したばかりの若者である私にとってかけがえのない経験でした。JETプログラムの強いネットワークがあったからこそ、カルチャーショックを乗り越えて、日本社会に馴染むことができたと思います。また、長野県の観光地をめぐる経験は次の仕事に大いに役に立ちました。

観光業で遊びを仕事に

JETプログラムの任期を終えたら帰国することを考えていましたが、長野県の取りまとめ団体アドバイザー



乗鞍高原で行われるナイト・スノーシューツアーの取材

(PA) からの紹介で、長野県観光部国際観光推進室の国際情報発信員に転職しました。

最初は、観光地に関する記事の執筆や SNS 投稿の作成、旅行者からの問い合わせの対応など、個人旅行者の誘客につながる仕事に携わりました。

そして時間が経つにつれ、仕事の幅がどんどん広がりました。旅行会社と商談を行ったり、旅行博でプレゼンをしたりするほか、資料の翻訳やスピーチの通訳をすることもありました。



長野県観光部長とコロラド州バール町長との会話を通訳

観光部で2年半働いたのち、現在の所属である（一社）長野県観光機構に異動し、情報発信のほかに、長野県公式観光サイト「Go Nagano」の運営や記事構成、デジタルマーケティング、データ分析を担当することになりました。日本の生徒たちに英語や世界のことを教える代わりに、海外の方に長野県の魅力や文化を教えることになったのです。



旅行博「Los Angeles Travel & Adventure Show」で長野県について紹介

おわりに

「日本の屋根」とも呼ばれる長野県に最初に来たときは、その雄大な山岳景色に感動しました。平坦な故郷と

全く違う景色でした。自分で選んだわけではありませんでしたが、長野県に来てよかったと到着した瞬間から思っていました。ただ、11年間も長野県に住むようになるとは、そのころ想像もしていませんでした。



コロナ収束後の誘客を図るためオーストラリアで開催された長野県の観光イベント

長野県に住むことになったのも、社会人として成長したことも、日本でできた友達と一緒に作った思い出も、全て JET プログラムのおかげでした。これからどんな仕事をするようになったとしても、ここで得た貴重な経験を活かしていきたいと思います。



シンガポールで開催された Japan Travel Fair で長野県を PR

プロフィール



Blair Guardia (ブレア・ガーディア)

アメリカ・メリーランド州出身。高校時代から日本語を勉強し、スキッドモア大学で美術とアジア研究を専攻した。2012年から2015年まで JET プログラムに参加し、現在は（一社）長野県観光機構でインバウンド誘客に携わる。趣味は登山、スキー、温泉入浴、写真撮影、ギター、ゲームなど。

4

日本で活躍する JET 経験者②

インバウンドアドバイザー Marie Alin (マリー・アラン)

はじめに

私は JET プログラム終了後に、「スナバ国」の唯一のプリンセス、つまり鳥取県の観光大使としての役割を担うことになりました。鳥取県の小さな温泉地である三朝町で国際交流員 (CIR) として来日してから、観光大使やインバウンド専門家になるまでの経緯についてお話しします。

日本との出会いから JET プログラムまで

日本の文化と言語が好きで、それらを高校や大学などで学びました。将来は日本とフランスの懸け橋になりたいと思い始めた矢先、JET プログラムについて知りました。そこで、ただ日本語能力を身につけるだけでは日本語が母国語の日本人には勝てないと思い、デジタルコミュニケーションやローカリゼーションを専攻しました。

鳥取県三朝町の 11 代目 CIR に着任

2016 年、私は大学を卒業して 3 日後に鳥取県三朝町の CIR として着任しました。社会人として初めての経験だったにも関わらず、三朝町役場の皆さんが温かく歓迎してくださいました。

JET プログラム合格の通知を受け取って、配属先の欄に「鳥取県三朝町」の文字を見たときの気持ちは今でも覚えています。なんと、10 年間ほど日本に関する知識

を増やしてきたのにも関わらず、鳥取県のことはほとんど知りませんでした。人口が全国で一番少ない都道府県である鳥取県については、ネットでも多言語の情報がほとんどなく、かなり戸惑いました。

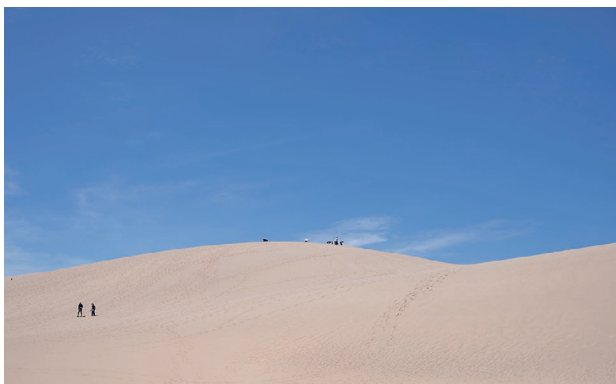


CIR 時代、取材の様子

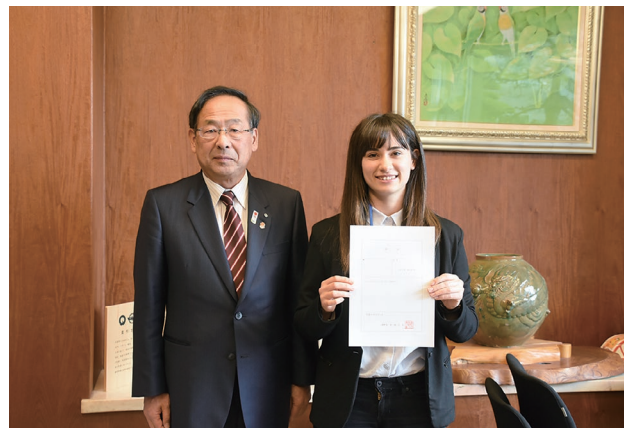
鳥取県の観光大使になるまで

三朝町の CIR は、学校訪問や文化講座、姉妹都市関係業務をメインに行います。私が仕事としてインバウンドの取り組みに関わるようになったのは、着任前の経験を活かして、プライベートで SNS での情報発信を始めたのがきっかけでした。

鳥取県の魅力を仏・日・英語で情報発信を始めて間もなく、三朝町長に認められ、業務として活動できるようにインバウンドコーディネーターに任命いただきました。



鳥取砂丘



インバウンドコーディネーターの任命式



三朝町の三徳山で行事の取材

JET プログラムの任期が終わりに近づくとき、鳥取県との縁を切りたくないという気持ちがありました。そこで三朝町役場や鳥取県庁の方々に相談したところ、鳥取県知事から「とっとりメルシープランセス」（観光大使のような役割）に、三朝町長から「三朝温泉観光大使」に任命いただきました。そのおかげで、現在でも山陰地方で活動的に仕事を行うことができています。

観光大使としての活動

JET プログラム終了後、インバウンドや観光業に本格的に関わりたいと思い、必要なスキルを身につけるため、中国地方の一番大きなまち、広島市に引っ越ししました。しかし、自分に合う職業に出会わず、フリーランスのインバウンドアドバイザーとして日本全国での活動を始めました。CIR 時代に得た経験を活かして、観光コンサルタントのほかに、国際交流、日仏通訳と翻訳、アテンドなどの仕事に取り組んでいます。

嬉しいことに、鳥取県庁の観光客誘致の施策として、SNS やブログを使用し、フランス語で情報発信を担当させていただいています。そして、私の日本のふるさと



観光大使として三朝町の姉妹都市で活動

である三朝町も、フランス大使館の関係者のアテンドのサポートや翻訳の依頼のほか、イベントにも観光大使として招待していただきます。

インバウンドアドバイザーとして心がけること

活動範囲は観光関係だけではなく、まちづくりと移住定住に関わるプロジェクトにも関わっています。例えばイベントにパネリストとして参加し、鳥取県についてお話しする機会が増えています。また、移住定住の応援団「とっとり diary」のメンバーに任命され、鳥取県のリアルな魅力を発信し始めました。

観光関係の仕事をはじめから、オーバーツーリズムの影響が目に入ることが増え、これによって観光客だけでなく、地元の方々の生活も困難になることに気づきました。オーバーツーリズムの問題に取り組みながら、山陰地域の魅力を守っていくことを自分に誓い、観光関連の仕事を通じて、持続可能な山陰地方の発展に注力しています。

今後も鳥取県へ恩返し

三朝町の CIR として、6 年間の貴重な経験ができました。鳥取県を離れて1年半が経つ現在、新しい能力を身につけながら、山陰地方のインバウンド専門家として貢献していきたいと思っています。なぜなら、三朝町民をはじめ、鳥取県の皆さんへの感謝の気持ちを、今も変わらず強く持ち続けているからです。

プロフィール



Marie Alin
(マリー・アラン)

フランス・シャンパーニュ地方出身。小学校で書道に出会ったことをきっかけに、日本に興味を持つ。フランス国立東洋言語文化学院で日本語を、ストラスブール大学でデジタルコミュニケーションを専攻し、5年で卒業。JET プログラムに応募し、2016年から6年間、鳥取県の三朝町の CIR として着任。現在はインバウンドアドバイザーとして全国で活動。

現職の概要

2018年9月から、ドイツ・エッセン市経済振興公社 (EWG: Essener Wirtschaftsförderungsgesellschaft mbH) のプロジェクトディレクターとして働き始めました。2023年4月からは、プロジェクトマネジメントオフィスと国際事業ユニットの一員として、主に国際関連業務を担当しています。

経済振興公社の全体的な目的は、市内企業の活動支援、雇用の創出・確保、そしてドイツ国内や海外からの企業誘致です。エッセン市は医療とエネルギー産業に力を入れているため、私たちの主な顧客やターゲットは企業や病院、研究機関などです。



JET プログラムでは、福島県の国際交流員 (CIR) として3年間勤務しました

地域経済を国際化

私が仕事で特に力を入れているのは、地域のビジネスコミュニティの国際化です。具体的には、外国企業や投資家にエッセン市での事業設立や投資を促し、地域の企業や関係機関と結びつけて双方に利益をもたらすことで、地域の国際コミュニティを支援することです。

この達成に向けては、さまざまなアプローチが考えら

れます。エッセン市で活動することも重要ですが、海外に出向くことも重要です。そして一般的には、顧客にとってサービスを提供する最初の、かつ理想を言えば唯一の窓口となることが重要です。

鍵は人脈

エッセン市と地元のビジネスコミュニティの懸け橋として、双方とのつながりが重要であり、広く、強力で、かつ信頼できるネットワークが業務の成功の鍵です。

そのため私の仕事のひとつは、地元企業や政府機関、病院、その他多くの人々との人脈作りです。これは市内、州内、国内、海外問わず大切なものです。

日本代表団の受け入れ

日本とのつながりと言えば、日本貿易振興機構 (JETRO) はよく一緒に仕事をするパートナーです。

最近の例を挙げると、いくつかの企業や機関からなる日本の代表団がエッセン市を訪れるというプロジェクトを共同で企画しています。代表団は地元企業を訪れ、さらにエッセン市長との会談も行います。私たちエッセン市が彼らにとって、最適なビジネスパートナーであるということを PR する役割を担うのです。

私個人のタスクとしては、エッセン市でのビジネスチャンスについて代表団にプレゼンし、潜在的なパートナー企業や組織について分析し、双方のミーティングを調整することです。典型的な BtoB ビジネスと言えます。

また、市政的な側面と言えば、国際的・経済的な要請に関して市長に助言を行うことで、政治をサポートすることもあります。

世界の都市との連携強化

エッセン市には、フランスやイスラエルなどに、いくつかの姉妹都市があります。それら姉妹都市とビジネス関係を構築することで、両市の結びつきを強化しています。

また、福島県郡山市とは姉妹都市ではありませんが、



2017年のNRW州と福島県による「都市間協力に関する覚書」締結式には、福島県のCIRとして参加しました

2017年に「都市間協力に関する覚書」を締結し、協力関係にあります。インドについても同様で、エッセン市のあるノルトライン・ヴェストファーレン（NRW）州とインドが協力関係にあります。2023年夏には、この取り組みの一環として、スタートアップ企業のビジネスピッチイベントをエッセン市で開催しました。

郡山市との交流

地域の経済振興公社が地元企業の海外進出を支援することは、ドイツ国内ではめったにありません。そしてさらに類を見ない事業として、エッセン市と郡山市の学校交流の支援が挙げられます。

ちょうどこれを書いている1週間前、12人の高校生がエッセン市の高校を4日間訪問しました。交流の主要テーマのひとつは、サステナビリティと再生可能エネルギーでした。このような事業を実現することができたのは、エッセン市が、注力する産業（エネルギーと健康）と専門知識（日本語）を経済的・政治的関心と結びつけて活動していることが理由にあります。

市を海外へPR

私の仕事の2つ目の大きな柱は、エッセン市を海外に宣伝することです。これはさまざまな機会に行うことができます。多くの場合、NRW州が経済振興公社のブースを出展する見本市に参加します。例えば、郡山市で開催されるエネルギー関連の展覧会「ふくしま再生可能エネルギー産業フェア（REIF ふくしま）」に定期的に出展しています。そこでは、セミナーでエッセン市についてプレゼンしたり、BtoBのミーティングに出席したり、ビジネスパートナーと話したり、新しい企業を訪問して

事業について知る機会があります。

さらに、毎年私が担当する最も大きな仕事のひとつは、エッセン市の市長、市職員、地域のビジネスパートナーをメンバーとして、海外視察を実施することです。旅行のテーマを決め、代表団を組織し、視察先でのプログラムの全てを企画し、航空券やホテルを予約し、そして最終的には出国から帰国まで同行することで、市長のアイデアを実行に移すのです。この視察で、2023年はイスラエル、2022年は日本を訪れました。

地元企業の海外活動をサポート

2023年から始まったもうひとつの活動が、エッセン市を拠点とする企業を海外で個別に支援することです。ある地元企業からは、9月にアメリカでの商談への同行を依頼され、潜在的な大口顧客との交渉をサポートしました。また別の企業からの依頼では、日本の大手企業とのミーティングを企画し、出張に同行しました。これ以外にも、EUのプロジェクトに携わり、フランスとベルギーに出張しました。

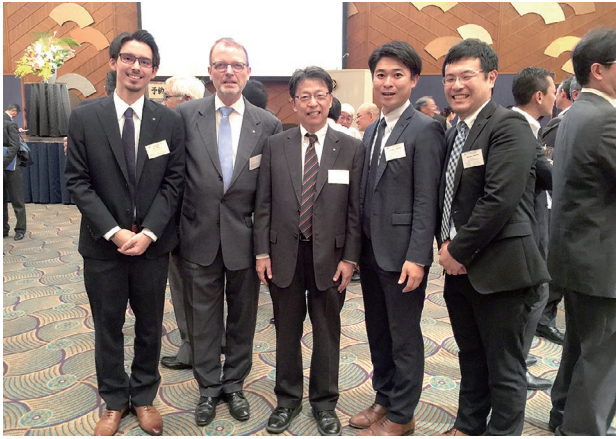
JET プログラムと現職のつながり

福島県庁でのJETプログラムの経験は、今の仕事をするための完璧な準備になりました。CIRとしての採用ではありましたが、福島県庁独自の肩書である経済交流員（CIB）を務めました。主な仕事は、福島県と交流関係にあるNRW州との「懸け橋」となり、経済交流をサポートすることでした。

東日本大震災後、福島県は再生可能エネルギーと医療機器を重点産業とすることを決定しました。NRW州と



CIR時代、福島県を訪問したNRW州の代表と知事の通訳



CIR時代、NRW州とデュッセルドルフ市が東京都で行ったネットワーキングイベントにて

の協力関係は、この2つの産業に重点を置いていたため、私は両分野について多くの見識を得ることができました。多くの企業やセミナー、ワークショップ、見本市などを訪問することで、「現場」から直接学ぶことができました。また、文書やプレゼンテーションの翻訳、ドイツについての講義、テレビのインタビュー、多くのリサーチワーク、そして外国からの訪問客が福島県を訪れた際のBtoBマッチングの企画・同行をサポートしたことで、多くの専門用語に加えて、業界特有の語彙や常識について学ぶことができました。これは英語や日本語だけでなく、母国語であるドイツ語においても言えることでした。さらに仕事を通じて、日本やドイツの多くの関係者やパートナーと知り合うことができ、福島県で得た人脈は今も私にとって大切なものとなっています。



CIR時代、県内の学校で行ったドイツについての講座にて、テレビの取材対応

ドイツと日本の懸け橋として

国同士をつなぎ、懸け橋となることは、私の人生において常に重要なことでした。現在の仕事は、郡山市との事業のように、自分自身の目標や自由に選択できるゴールに向かって、プロフェッショナルなレベルで懸け橋としての役割を担い続ける機会を与えてくれます。



2023年10月、エッセン市の企業と一緒に郡山市周辺の水素関係の企業訪問

ここ数年で、日本のさまざまな都市や地域との協力が、エッセン市でのプロジェクトのリストに加わりました。私はこれらのプロジェクトを継続し、経済交流だけでなく、学校交流のようなプロジェクトにも携わりたいと考えています。文化的な要素も加わればさらに良いものになるでしょう。それは現時点では少し難しいかもしれませんが、行政や在デュッセルドルフ日本総領事館のようなパートナーと協力すれば、可能になるかもしれません。最終的には、ドイツと日本の友好関係の強化に貢献し、両国の次の世代に引き継ぐことができると考えています。

プロフィール



Go Theisen (剛・タイゼン)

ドイツと日本のハーフ。ドイツ・エッセン市で育ち、福島県の高校に通う。デュッセルドルフのハインリッヒ・ハイネ大学で学んだのち、JETプログラムでCIRとして来日。2015年から2018年の間、福島県庁で経済交流員（CIB）を務める。プログラムの終了後に帰国し、エッセン市経済振興公社にて勤務、現在に至る。

6

海外で活躍する JET 経験者②

オースティン・ピー州立大学 教授 David Rands (ディビッド・ランズ)

はじめに

1993年から1996年まで兵庫県姫路市で外国語指導助手（ALT）をしていました。ディビッド・ランズと申します。現在は、アメリカのテネシー州にあるオースティン・ピー州立大学（APSU）で歴史学の教授として教鞭を執る傍ら、アジア研究プログラムのコーディネーターを務めています。また、アメリカへの留学を希望する日本の学生が抱える制度的・経済的な問題を軽減することを目的とした、APSUの新しいプログラム「ブリッジズ・イニシアチブ」のメイン・ファシリテーターも務めています。

こうしたプログラムを推進する役割を担う中で、自分がJETプログラムで得た経験の意義について、改めて考える機会を得ています。

姫路市での思い出

30年前、ALTとして姫路市の2つの中学校に勤務し、日本の若者が異文化コミュニケーションに対して抱く需要を目の当たりにしました。これだけ長い年月が経っても、四郷中学校でバスケットボールのコーチを手伝ったことや、大津中学校の運動会でピッチャーマウンドに足を引っ掛けて顔を地面に打ち付けたことなど、たくさんの忘れられない思い出があります。教頭先生から教わった囲碁は、今でも時々打っています。

ALTの経験は、JETプログラムの終了後、日本の教育システムについてさらに研究するための基礎知識を私に与えてくれました。

国境と時を隔てた友情

ALT時代には、大切な友人もたくさんできました。今の学生には理解しがたいかもしれませんが、当時はインターネットやSNSがなかったので、国境を隔てた友情を長年にわたって保つのは今よりずっと困難でした。しかし、JETプログラムで得たつながりは尊いもので、2023年の末から2024年の初めにかけて行った日本研修旅行

中、学生たちを連れて行った姫路城に当時の友人が同行してくれました。時間が経ち、お互い歳を重ねたものの、再会を果たすとまるで別れたのがつい最近であるかのように感じ、とても楽しい時間を過ごすことができました。



姫路城にて、吉村英之さんとAPSUの学生らと

姫路で長年の友人に別れを告げたのち、学生たちと向かった大阪の歴史博物館では、また別の友人ウィリーとエイミーにも会うことができました。この2人にも再会できたことで、私自身が今だにJETプログラムと密に関わっているということを再認識することができました。

出会った当時、ウィリーとエイミーは京都の大学に留学をしていました。その後、彼らがJETプログラムに応募する時には、私が推薦状を書くことになったのです。ウィリーは1年間ALTとして働いたのち、アメリカの大学院に進学し、現在は文部科学省の奨学生として、大阪大学で日本の音楽とニューオリンズのつながりについて研究しています。エイミーは現在もALTとして、大阪府の小学校で働いています。



Amy NguyenとWilliam Archambeaultと

2人の日本での経験を直接学生たちに伝えることができたのは、本当に有益でした。

日本での研修旅行

私は長年にわたって、学生を引率して2～3週間の日本研修旅行を行っていますが、何人もの学生がJETプログラムや留学などの手段で日本に住むことを選んでいます。

学生たちがJETプログラムに応募する手助けができることは、私の仕事のメリットのひとつと考えています。

今回の研修旅行は大変特別なものになりました。学生の1人が旅行中に書類審査合格の知らせを受けたのです。彼女は、大学入学当初から日本語を勉強し、両親の仕事のため渡米した日本の男子2人の家庭教師をし、英語教授法(TESOL)を学び、日本関連のイベントでボランティアをし、さらには2度研修旅行に参加するなど、理想的なALTになるための努力を惜しみません。新幹線の中で、面接選考に進んだという知らせを受けた彼女の笑顔は車内を明るく照らすようで、私まで特別な高揚感を味わいました。このように学生たちの努力が認められた瞬間に立ち会えることは、この仕事で得ることのできる素晴らしい経験です。



鎌倉にて、学生とAPSUの提携先の北鎌倉女子学園高等学校の生徒らと

学生との日本研修旅行を通して、JETプログラムとのつながりを感じたことに加えて、JETプログラムのおかげで、国際的な交流や友好関係を築くことに対する積極性が生まれたと感じています。これまでに、学生の文部科学省の奨学金取得や、教職を志す学生の日本への就職を支援してきました。また、大学院で教えた学生の1人が日本で博士課程へ進むサポートや、JOIプログラム^(※)

の監修もしました。

APSUの提携校との交流プログラムの促進から日本での就職を目指す学生の支援まで、さまざまな形で日米の懸け橋になるということは、JET参加者時代から変わらない私の仕事理念です。

留学生を増やすには

ブリッジズ・イニシアチブは、JETプログラムの考えを実践することで、どのようなことが可能になるかを示す一例です。APSUでは、外部の識者から同レベルの大学に比べて留学生が圧倒的に少ないという指摘を受けました。同時期に、在日米国大使館は、アメリカで学ぶ日本人学生の数が減少していることを理由に、日本人学生の留学を支援する革新的な方法を求めて助成金の創設を発表しました。

そこで私は、アメリカ留学を希望する学生が直面する問題に目を向け、可能な限りそれらを軽減、あるいはなくすことができるのではと考えました。

問題解決の鍵

時には、なぜそのような問題があるのかを理解することが、それを乗り越える鍵になることもありました。

APSUの入学認証許可のプロセスでは、すべての新生生に対して、大学入学資格の証明を提出することを求めています。コロナ禍以前は、APSUへの入学のため国内外の学生は共通試験を受け、この試験結果をもって大学への入学資格があるとみなしていました。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行により、同試験からの脱却が急がれ、高等学校卒業資格がこの入学資格に取って代わったのです。

日本の高等学校からAPSUへの留学を目指す生徒にとって、それまでの共通試験は高額かつ難易度の高いものでした。日本の高等学校と提携を結ぶことで、APSUは提携校のカリキュラムと生徒の成績を評価することができます。提携校の全生徒が受ける無料のクラス分け試験が、アメリカの大学の共通試験という高いハードルに置き換えられたというわけです。

金銭面でもサポート

為替レートの低迷とアメリカの教育費の高さは、日本からの留学生が直面するもうひとつの問題です。為替

レートについてはなすすべがありませんが、APSU はコスト面でできる限りの支援を行っています。

日本の提携校から進学する学生には、地元の学生とほぼ同額で授業を受けられるよう資金援助をしています。経済的な問題が完全に解決するわけではありませんが、この方法によって APSU の授業料は 50% 近く下がり、日本の私立大学と同等になります。

私が JET プログラムで得た経験は、人々を結びつけるこのような解決策の種をまいてくれました。

実を結ぶ JET 参加者のつながり

ブリッジズ・イニシアチブの企画にあたり、APSU は海外の新たな地域の高等学校との提携を模索しました。私は日本の国際交流団体や JET プログラムで知り合った人々の助けを借りて、日本の高等学校に連絡を取りました。

私の教え子であり、北海道釧路市で ALT として勤務するジャスティン・ランダール（本誌 412 号「JET からの手紙」執筆者）は、市の教育委員会と連絡を取るのを手伝ってくれ、その結果、北海道釧路北陽高等学校と提携することになりました。彼が JET プログラムの考え方に共感していることは、釧路市で国際化を促進し、懸け橋になりたいと願っていることから見てとれました。

兵庫県立国際高等学校の松本教頭も同じです。ブリッジズ・イニシアチブの構想について話しているうちに、私たちは 2 人とも JET プログラムの関係者であることがわかりました。松本氏はかつて兵庫県の JET プログラム担当を務めたことがあり、私たちは共通の経験を通してつながることができたのです。

外国から来た ALT であろうと、日本人の担当職員であろうと、JET プログラムで得る協力とつながりは、日本と母国との懸け橋となることを後押ししてくれます。



松本久永教頭と



APSU の生徒と提携先の羽黒高等学校職員らと

JET プログラムで得たもの

私は歴史学者ですので、「たれば」の話をするのはめったにありません。しかし、JET プログラムに参加しなければ、私の人生の軌跡は大きく異なっていたであろうことは容易に想像できます。JET プログラムは私に、日本に行き、プログラムの終了後も学業に活かせるような日本語能力を身につけ、最終的には日本について研究し、教え続けられる仕事に就く機会を与えてくれました。また、日本とアメリカの懸け橋となり、この経験を分かち合いたいという考えも生まれました。

もし今の私が JET 参加者だったら、1993 年の私よりはるかに効果的な活動をしているに違いないでしょう。しかし、姫路市での経験は私の人生とキャリアに大きな影響をくれました。JET プログラムには、感謝の気持ちでいっぱいです。

(注) JOI プログラム：国際交流基金とアメリカの非営利団体であるローシアン協会が共同で実施する、アメリカと日本の草の根の交流を促進する事業

プロフィール



David Rands (ディビッド・ランズ)

アメリカ出身。1993 年～1996 年兵庫県姫路市 ALT。オースティン・ピー州立大学歴史学教授。機能ベースの歴史的空間認識の継続的研究に加え、歴史理論、比較史など、幅広い研究テーマを持つ。世界史のほか、日本史、アニメや漫画を通しての日本、侍の伝統、初級日本語、国際ビジネスなどの授業を担当。